
空が青い日

毬藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空が青い日

【Nコード】

N5264R

【作者名】

毬藻

【あらすじ】

そんな日に、私と鈴木さんは海辺で出会った。

自分の人生を終わらせようとしていた、二人の結末は。

一日目

太陽は眩い光を放ちながら、優しく地上を照らしている。それはいつどんな時も、どこにいても。

ザパン、ザパン…。

今日の海は穏やかだ。波は静か。砂浜には誰もおらず、ただデコボコの大きな岩が無表情でそこに立ち並んでいる。

その砂浜を、私は素足でゆっくり歩いた。足跡をつけながら、一歩一歩。ある所まで来ると、ピチャン、と押し寄せてくる波が足の指先に触れた。

「何してんの」

ふいに聞こえた背後の声。振り返ると、岩に背をもたれさせて私を見ているスーツ姿の男と目が合う。

「そっちこそ」

男は少し笑って、胸ポケットから煙草を一本取り出した。ライターで火をつけて、フツと煙を吐き出す。

そのまま男はこちらを見続けているようだったので、私は気分が悪くなつて砂浜へ戻った。靴を置いていた岩場まで戻り、足の砂を払う。

「やめるの？」

隣で男が煙草を吸いながら、目だけでチラリと私を見た。

「どうしてオジサンに見られなきゃならないの？」

人に見られながらなんて嫌だ。もつと気持ちを落ち着かせて、誰にも気付かれないようにひっそりと沈みたいのに。

「…ねえ、煙草、一本頂戴。一回ぐらい、吸ってみたかったんだよね」

「いいよ」

男はそう言つて、サツと抜き取つた煙草を私に手渡した。

「啜えて」

口にソレを挟むと、男はカチツとライターを鳴らして煙草に火をつける。

スウツ…。

「ゴホゴホツ!!」

「どう、美味い？」

口元に笑みを浮かべて男は尋ねた。この反応で、どうやったら美味しそうに見えるのだろうか。私は黙つて煙草を唇から離す。

チリチリと燃えていくその先端。

岩場で二人、私と男は海を見ながら座り込んだ。本当に穏やかで、耳の中には波の音だけが心地良く流入してくる。

「なんで海？」

ふいに男が尋ねた。

「人つて最後には、海に還つて行くんでしょ。だから、私も海に還るの」

約40億年前に、生命は海の中で誕生したと言われている。命を終わらせるなら、自然の中、命というものが生まれた場所で死んでいくのが当然のことだと私は思った。

「へえ…。俺も海は好き。だから、ここに來たのかな」

シルバーの携帯灰皿を取り出して、男はそこに吸殻を入れた。小さな隙間から、沢山の吸殻が覗き見えた。

「…オジサンも？」

「オジサンじゃねーよ。まだ26だよ」

「オジサンじゃん」

「……」

男はジロリとこちらを睨んだが、少ししてフツと笑う。

「俺は鈴木。アンタは？」

「えっ、私も、鈴木…」

「マジかよ」

「マジ」

奇妙な偶然に、私たちは思わず顔を見合わせて頬を緩めた。

「名前は？」

「ユイ。鈴木ユイ」

「ユイね。アンタ、若いよな…高校生？」

鈴木さんは私の顔をマジマジと見つめながらそう尋ねる。

「そう。16…だから高校生。一応」

学校なんてもうろくに行っていないけれど。そんなもの私にはどうだっていい事だ。

「そ…。色々あるよな。若くても」

鈴木さんは再び煙草を取り出して、ゆっくりと吸いだした。その横顔を見ながら、変わった人だな…、と私はぼんやり思った。

普通の大人なら、即説教だろう。怒るのではない、自分だけが理解しているフリをして私の中に介入して来ようとする。偽善者！私のことなんて何も知らない、本当は何も分かっていないクセに。自分の価値観を押し付けて、私の考え方を否定しようとするんだから、だけど鈴木さんは私に深くを尋ねてくることもせず、そうするのが当然だと言うように接してくれた。それは一番助かることだった。私は異端ではない…そこらの人間と何も変わらないのだと安心させてくれる。

「もしかして、鈴木さんかなあ」

「何が」

「私を何処かへ連れ出してくれる人。私、探してた…こんな生臭い所じゃなくて、もっともつと良い所に連れて行ってくれる人。心が穏やかで居られる場所。天国…」

不思議そうに、鈴木さんは私を見ていた。私も鈴木さんの顔をジッと見つめる。絶対に逸らさない。その顔が頷いてくれるのを、私は心のどこかで期待していた。

「何だそれは」

小さく笑って、鈴木さんは私から顔を逸らす。半分も残っている煙草を灰皿にそのまま押し入れて、岩場から立ち上がった。

「もう行っちゃうの？」

「ああ」

「もっと話そうよ」

私がそう言っていると、鈴木さんは静かに私を見下ろして、また海へと向き直った。ジャリ、と足元の靴が音を立てる。

「…じゃあ、そうだな。またこんな晴れた日に会おうか。明日か、明後日か…」

「本当！？」

「本当。じゃあ、またな」

鈴木さんはスタスタと海辺を進んで、石造りの堤防の上へと階段を上っていった。

（本当にまた鈴木さんに会えるんだろうか）

その姿が小さくなる度に、私は何故か、そんな不安を感じていたのだった。

二日目

翌日は、私が望んだ通りの良い天気だった。

「良かった！」

昨日の夜から天気予報だけはしっかりチェックしていた。今日から三日間は晴れ続きだ。

午前11時。私は急いで家を出た。唯一の親である母親は、リビングに座ったまま何も言わかった。もう暫く口もきいていないぐら이다。

『アンタはあたしの言う事だけきいてりやそれで良いのよ。それ以上の価値なんて無いんだから』

母親から言われた言葉。私のことを道具として見ている。私は決して母親に何か特別な事を求めているわけではなかった。ただ受け入れて欲しいだけ。それでもこうなってしまうたからにはどうしようもなかった。だから私は母に何かを求めることは止めにしたのだ。バスに乗って約30分、海岸公園前で下りる。既に潮の香りがして、波の音が聞こえてきそうだ。沢山の木々が生い茂った公園を通り抜けて、暗い一本道を抜けた先はすぐに砂浜へと繋がっていた。そこは決して綺麗な場所というわけではない。しかし私がふとした時に足を運びたくなるのは、いつもこの場所だった。少し暗い、そして大きくゴツゴツした岩があちこちに点在している砂浜は、人が滅多に来ることも無く、私の気持ちをゆったりと落ち着かせてくれた。

「ああ、いた」

岩場に腰を下ろしてボンヤリしていると、頭上から声がかかる。

「ちゃんと来てくれた」

「約束したからな」

鈴木さんは相変わらずスーツ姿で、苦しそうにネクタイを緩めた。

そのまま私の隣に腰を下ろして、すぐさま煙草を取り出す。

「好きだね。煙草」

「あ？ああ…、まあ、気付いたら、吸ってるんだ。だから、好きってことなのかもな」

口に咥えて、火をつけて。一連の仕草を慣れたようにこなして、鈴木さんは大きく煙を吐き出した。

「ハア…」

その溜息にどんな思いが含まれているのか、私には分からない。自分の心に、他人にむやみに入り込まれるのは疎ましいことだと、私にはよく分かっていた。だから鈴木さんにも、私が嫌だと思う事をしたくはない。それでも何故か、彼のことが気になった。鈴木さんという人について、私はもっと深くを知りたいと思ってしまった。…どうした？」

横顔に視線を感じたのか、鈴木さんは私の顔を見て、煙草を口から離す。

「ううん。別に…」

私がそう言うと、再び黙って煙草を吸い始める。

（もしかしたら、こういう気持ちなのかもな…）

ふと、ぼんやり思った。他人が私に介入してくる時。面白半分で話しかけられたり、自分ならどうにかできる、なんて勘違いして近寄って来たり、色んな人がいるけれど。私が鈴木さんに対して感じる様に、ただ私のことを知りたくて…、知ろうとして私のところにやってくる人もいるのかもしれない。

（それって…、鬱陶しい？）

「もう昼過ぎだな。腹減った。アンタは」

「私もお腹減った。朝から何も食べてないの」

「そりゃダメだな。取りあえずメシ食おう」

砂浜を暫く東に進むと、私がやって来た海岸公園側の入り口とは反対のメイン入口、寂れた観光みやげセンターが静かに佇んでいる。相変わらず人はまばらで、犬の散歩をしているお年寄りが2、3人、

のんびりと歩いているだけだった。

観光案内所の隣、小さな食堂は、営業しているのかどうか分からないくらい人の気配が感じられない。店中に入るのに少しだけ戸惑った。ガラガラと建付けの悪い扉を開けたその暗い空間には、いくつかテーブルは並んでいたものの、やはり誰の姿も見えなかった。

「すみません」

店の奥へ声をかける。少しすると、40代ぐらいの女性が店の階段を降りてきて驚いた顔をした。

「ああ、お客さん。ごめんなさいね、今準備しますから。メニュー決まった？」

「何にする？」

鈴木さんが振り向いて尋ねる。私は急いで壁に貼り付けてあったメニューを確認した。

「…天ぷらうどん」

「じゃあ、ソレと…、醤油ラーメンください」

「はいよー」

窓側のテーブルに向かい合って座る。喉の渴きを感じて、注がれたコップの水を一口飲んだ。

「美味しい…」

「そんなんでも美味しいんだったら、世話ねえな」

それから数分もしない内に、注文したメニューが机に並べられる。「ゆっくりしてね」

女性に興味深そうに私たち二人を見比べて、テーブルから離れて行った。こんな人気の無い、しかも平日の午後。スーツ姿のサラリーマンと、学生のような若い女が二人で訪れてきたのだから、怪しんで当然だろう。店の奥からは、チラチラと刺さる様な女性の視線が続いている。

「海、まだ寒そうだね」

「そうだな。まだ三月だからな…入るのは無理だよ」

「……」

足の指に触れた水は冷たかった。その感触をぼんやりと思いだしながら、うどんを啜る。

「美味しい」

「良かったな」

私たちは黙って麺を咀嚼し、胃に取り入れた。汁を飲み込むと、体の隅々まで熱が染み渡る気がした。

再び元の場所まで戻り、砂浜に寝転がる。

「寒い。けど気持ちいい」

波の音と、綺麗な青い空。ユラユラと漂う薄い雲は、眩しい太陽の光と同じようにどこまでも続いていて永遠に途切れそうになかった。

「ねえ…、死んだらどこに行くのかな」

空を見ながら呟いた。

「死んだら、か」

「私、こんな世界にいたくないよ。何も求めることがない…。この先、どういう事がしたいとか、何を目標にして生きていきたいとか、全く思いつかないの…。未来に希望なんて無い」

隣に寝転がっている鈴木さんは、何も言わずに私の言葉を聞いていた。

「自殺したら、地獄に行くって言うじゃない。でもそんなのおかしいよ。人を殺しても更生したら救われるのに、自分を殺したら救われないの？何も悪い事していないのに、そんなの不公平」

死ぬ事がそんなに悪い事なのだろうか？私には分からない。どうしてこんなに責められなきゃならないのか…。

「私がいなくなったって、誰も悲しむはずない。寧ろ喜ぶにきまつてるよ。だから私が死ぬことは、私にとっても幸せだし、皆にとっても幸せ。良い事しか残らない」

「何言つてんだよ」

突然鈴木さんが上半身だけ起き上がって、私を見下ろした。

「死んだらそれで終わりだろうが。良い事も何も、残らねえよ」

無表情のような、怒りを伴ったような、鋭い瞳。

「アンタが死んだら、悲しむ人はいるよ。絶対に。死ぬってことは自分勝手なことだ。他人に迷惑しかかけねえ。だから死ぬなんて事に、良い意味なんてねえよ。自分の我儘を押し通すだけの行為…何かを残すためのものじゃない」

そう言つて、鈴木さんは私から目を逸らした。そうしてまた、胸ポケットから煙草を取り出す…どうしていいか分からないみたいに「じゃあ…、何のために死ぬの」

私は上半身を起き上がらせて、鈴木さんの横顔を見つめた。火の付いていない煙草。鈴木さんの口元で微かに揺れた。

「何のため…つて、何の意味もねえよ。自分がそうしたいだけなんだからさ」

力チリ。

煙草の先に火が灯った。

確かに死ぬことに意味なんて無いのかもしれない。

だけど誰も皆、自分を殺すことに意味を求めているのだろうか？現状に満足できない、ここから逃げ出したい、この先生きていくのが辛い…。

だから死ぬ。そこには何も意味なんか無くて、ただ今の現実から離れたいだけだ。

『死んだらどこに行くのか』

もしかしたらこんな所より居心地が良くて、素晴らしい所かもしれない。そんな期待がきつと胸のどこかに存在している。だけど実際に良い所だなんて、何の保証もない。

それでも今より悪いことなんてあるの？生きている、この世界が既に地獄のようなものかもしれないのに、死んでもなお苦しみ続け

ることなんてあるの？

『無』

たとえ死後の世界に何も存在していなくても、そこから何かを作り出せる可能性は存在しているんじゃないだろうか。私たちはきつとそこで、新しく何かを始められるはず。そうすることでやっと、自分というものを見つけ出せるような気がするのだ。

そんな風に、私は死ぬことに希望を抱いているのだけれど。

でも多分、鈴木さんはこの世界、そして死んだ後の世界にすら、何の希望も抱いていないような気がした。

穏やかな雰囲気、決して心を乱す事の無いような瞳。

（この人は一体、どうしたいんだろう）

私には分からない。

「じゃあ、またな」

「…うん」

当然のように、そう言って別れる。

（また会える）

それだけで私の胸はドクンと高鳴った。左胸を触ると、服の上からでも振動が伝わる。

生きている…、そう実感した。

三日目

青い空から光が漏れている。

海に向かうため、今日も私は家を出た。

バスに乗って、海岸公園前で降りる。もうずっと行き慣れた道のりなのに、こんなにも明るい気持ちで向かうのは初めてだった。あの木々で覆われた暗い公園、寂しい海辺…、どこを想像しても、美しく見える。素敵な場所。

波は昨日よりも少しだけ高かった。海岸に打ち寄せてくる音は、実際に見ているそれよりも大きく感じる。

三月の海は、冬ほど厳しい空気を纏ってはいなかったが、夏ほど優しく迎えてくれるわけでもない。強いて言うなら無表情だ。

もう少し時間が経てば、もっと人が集まりだすのだろう。この寂れた海岸にも、それなりに誰かに求められて、必要とされる時期が来る。今は忘れ去られたように静かだけれど、この静けさは永遠じゃない。

靴が砂浜に沈む音。一定の心地良いリズムと波の音が、私を孤独にさせた。こんなに自由な場所に居るのに、私は一人だった。どうして？

鈴木さんは昨日よりも遅めの、午後を少し過ぎた時間に現れた。

「ユイ」

「鈴木さん！」

思わずそのスーツの腕に触れそうになって、手を止める。

（私、何をしようとしているんだろう）

「今日はちよつと、穏やかじゃないな」

鈴木さんが波を眺めながら呟いた。私もそれに静かに頷く。

「明日まで晴れの予報だったのに、雨、早まりそうなんだって」

天気予報が告げていた。何で雨なんか降るんだろう…どうでも良

い時はずっと晴れたりしているのに、よりによって降ってほしくない時に降るんだから。

「ああ…、じゃあ明日は雨かな」

定位置となった、凹凸の少ない岩場に腰かける。そうして鈴木さんが予想通り胸ポケットから煙草を取り出したので、私は思わず笑ってしまった。

「何だよ」

「ふふ…、ウウン、何でもない」

ニヤニヤしながら隣に座る私を見て、鈴木さんは眉を寄せたまま煙草に火をつけた。

「変な奴だな、アンタ」

「鈴木さんに言われたくないよ」

「フン…、まあそうかもな」

意外な返事が返ってきて、チラリと鈴木さんの顔を横目で覗き見た。無表情なのか、静かに微笑んでいるのか、ここからでは判断出来ない。

「鈴木さん、変な人って言われるの？」

「…そうだなあ。変っつー以前に、俺はどうしようもない馬鹿なんだよな。だから、取り返しのつかないことを平気でやったりする…。俺のせいで周りの人間も滅茶苦茶だ。それを分かっているのに…、俺はもう自分じゃどうすることもできない状態に陥ってる…」

ブツブツと呟くように聞こえた鈴木さんの声は、これまでの柔らかなものではなく低く擦れていた。私には何の事だか理解できそうにない。深く尋ねたいのに、私は自分の心にブレーキをかけてしまった。

（嫌われたくない）

煙草の葉がジリジリと燃えている。眉間に皺を寄せ、鈴木さんは煙を肺に押し入れるように強く吸い込んでいた。喫煙者は沢山いるけれど、本当に美味しそうに煙草を吸っている人は滅多に見た事がない。誰もそれが当たり前のように、煙草に火をつけて、煙を吸い

込み、吐き出す。義務的な一連の動作。

ジリジリ…。

「あそこ、登った事あるか？」

ふいに鈴木さんが海辺の西に佇む小さな岩壁を指差した。

「あの岬？あるよ。中学生のとき、遠足でよく登った」

砂浜を西に真っ直ぐ進むと、誰もが登れるように綺麗に階段が設けられた岩場へ辿りつく。斜面は少しキツイものの、危険ではないようにしつかりと柵が取り付けられており、高い所から海を見下ろすのには絶好の場所だった。

「そうか。俺も確か…遠足で行ったことあるな。この場所に来たら、せつかくだから登ろうって気分になるんだよな」

懐かしそうに、鈴木さんは目を細めた。私は鈴木さんの口から少しずつ色んな事が聞けることが嬉しくて、つい笑顔で鈴木さんに向き直った。

「ねえ、登る？」

「登らない」

「ええっ」

この流れからいけば登りたいんだろうと思っていたのに、まさかの返事。私のリアクションに、鈴木さんは顔を歪めて大爆笑した。

「ハハハッ、いい反応、アンタ」

「な、何よお。の、登りたいんでしょ？」

「登らねえ。アハハ…」

訳が分からない。結局鈴木さんは登る気がなかったようだ。少し残念な気がしたけれど、私としては鈴木さんがこんなに笑ってくれたことだけで十分満足な気持ちになれる。

不思議。

海の方こう側へと、徐々にオレンジの光が海面に沈み出した頃。

灰色の雲が私たちの頭上を覆い出す。

「やっぱり雨だな」

「そうだね…」

そしたらきつと、明日は会えない。

そんな私のモヤモヤした気持ちに気付かずに、鈴木さんは「じゃあな」と手を上げて行ってしまった。

「じゃあな、か」

またな、じゃないことが、私には不安だった。

夜になると、既にゴロゴロと空が唸り出していた。微かに、雨が降っているような音も聞こえる。

（明日までに、やみそうにないな）

溜息をついて、ベッドに寝転がった。午後11時45分。もう少しで日付が変わりそうな時間。

階下から、玄関のドアが開く音が聞こえた。母親が帰って来たのだ。同時に数人、男の声が聞こえた。

心臓が高鳴る。

ああ…今日は来たのだ。

母親が私を呼ぶ声。階段を上がってくる足音。一人…、二人。

部屋のドアが開いた。スーツ姿の男が立っていた。電気が消える。ベッドに誰かが入ってくる。

「おやすみ」

そう言っ て母親がドアを閉めた。

四日目

朝になると、昨日とは比べ物にならないくらい大きく雨の音が響いていた。

（雨だ…）

今日は外に出ずに部屋の中でゆっくりしよう。明日になったらまた晴れるようだし、暫く出かけてばかりだったからこうして過ごすのもいいかもしれない。

そう思いながらベッドの皺を綺麗に直し、カーテンを開ける。それでも部屋の中は大して明るくはならなかった。窓に叩きつけられる雨粒は、筋を作りながらスルスルと流れていく。

「今日は、家にいるのね」

部屋の入り口に立って、母親が静かに私を見ていた。

「雨だから」

「丁度、良かったわ。…ねえ、来て」

母親が部屋の外へ顔を向けて、誰かを呼んだ。その背後から背の高い、中年の男が現れる。

「あたし、出かけなきゃならないから。アンタ、この人の相手よろしくね？」

男はゆっくり近付いてきて、私を見て笑った。

「ユイちゃん、だっけ。今日はゆっくり、楽しもうね」

私の耳元に口付けて、また低く笑った。嘲笑。それを見ている母親と目が合った。

笑ってる。

「…ッ」

胃液が込み上げてきた。

この現実に。

目の前で面白そうに私を見ている、男の顔がハッキリと映し出される。瞳の動き、肌の色、うっすらと浮き出た髭。いつものように

真暗な空間ではなく、周りがよく見える時間だから余計に現実が迫ってくる。逃げ場のない部屋の中。

急に恐ろしくなった。いつものことなのに、こんなに良く見えるから。

こんなに母親が私を見ていなかったから。

「わああ」

声を上げて、目の前の男を突き飛ばした。そのまま母親の顔なんて見向きもせずに、私は部屋を飛び出した。

もういい加減、我慢出来なくなっていたのかもしれない。夜、何も見えない空間ならとわざわざ母親に懇願して言いなりになっていたのに、それすらももう叶わなくなってしまった。

母親というもの。それは私が一番恐れていた存在であり、私の理性をただ失わせていく。

外に出ると、強い雨が体を容赦なく打ちつけてきた。それでも私はそんなことなどどうでもよくて、バスに飛び乗る。それが当然のように、私の行く場所は一つだった。

暗い海、横殴りの雨。

いつもの光景とは全く異なっていた。きつと怒っているのか、泣いているのか、そのどちらかだろう。

ぐちゃぐちゃになった砂浜でも、僅かに足跡だけは残るようだ。

私はゆっくりとその跡を辿っていた。辿りついた先には、大きな岩が一つ、ドッシリと存在しているだけだ。それでも私は気付いていた。岩の裏側に回ると、そこには予想していた通りの人。びしょ濡れになり、岩壁に背を預けて力無く座っている、鈴木さんの姿があった。

「鈴木さん」

「何してる……」

顔を上げて、鈴木さんは驚いたように私を見ていた。その顔に降り注ぐ雨粒が、見開いた鈴木さんの瞳の中にも入り込んでいく。
「そっちこそ」

三日前、出会った時と同じやりとり。鈴木さんの隣に腰掛けて、私も同じように全身で雨を受け止めた。

「気持ちいい」

「変な奴だな…アンタ」

「だから鈴木さんに言われたくない」

「……」

伸ばした足は、押し寄せてきた波が触れるほどの距離だった。冷たい…この時期の海は、やはりまだ厳しさが残っている。

しばらく私たちは黙って雨を浴びていた。

「体の汚れ、落ちるかな」

全身を打ちつける雨。それは私の体も心も、綺麗に洗い流してくれそうな気がした。

「ずっとずっと、気持ち悪くて。もうきつと、私は綺麗にならないんだと思う。でも…、どうしてもこうしたくて」

ザアアア…

雨の音が大きくなった。肌に触れる感触も、それと同時に強くなる。そのまま目を閉じると、鈴木さんが私の上に覆い被さってきた。

「鈴木さん？」

「雨避け」

目を開くと、びしょ濡れのまま私の盾になっている鈴木さんと目が合う。

「アンタ、汚れてねえよ」

「……」

胸の奥から、言いようのない苦しさが這い上がって来た。何か言おうと思っても、口が開かない。

「汚れてんのは、俺」

「わ、私の方が、汚いんだよ。本当に体が、汚れて…。中身まで…」

顔にかかる雨が減っただけでも、寒さが減少していくのが分かった。それとは反対に、鈴木さんの唇はほとんど色を失っている。

「ユイは、綺麗だよ」

言葉が出てこなかった。苦しさ、込み上げてくる。頬のあたりまでそれはやってきて、力を抜くと一気に溢れだしていきそうだった。

「……」

「俺はもう、ダメみたいだな。もう、どうにもならなくて…。もともアンタにも、何も言える立場じゃなかったんだ」

そう呟く顔を見ながら、ゆっくり鈴木さんの頬に手を伸ばした。

その悲しそうな顔を見ていたら、私は何となく、分かってしまった。

「どこ行くの？」

「あ？」

「私を置いて行かないで。一緒に連れて行ってよ…」

私と鈴木さんの視線が絡まって、時間が止まったみたいに雨の音が遠くに聞こえた。もう何も気にならなかった。自分がどうなろうと、これからどうなろうと。

「アンタなら、連れて行ってもいいかもな…」

鈴木さんは多分笑ったんだと思う。寒くて引き攣っていたけれど、そのまま冷たい唇が、私の唇に触れて。二人、背中に手を回して力を込めた。寒さを補うために、お互いに触れるために。

目の前に存在している「感情」。

私はこれを認めるのが怖かった。今まで求めてきたものとはあまりにもかけ離れていて、私は自分自身を否定してしまいそうだった。それを受け入れると、自分はこの先どうすれば良いのか完璧に見失ってしまう。

だから私たちは、それ以上何もできなかったのだろう。口づけをして、相手の体に触れて、お互いを感じ取るだけ。

本当は、お互い相手の全てを求めあっていた。額、頬、唇、視線…触れ合う体の至る所から、それは痛いぐらいに伝わって来るのに、

敢えて気付かないようにしていたのだ。

唇だけに意識を集中させて、舌を合わせる。それだけで相手の全てを得ようと必死に噛みついて。

きつと、それが「生」を求める行為だったから。

私たちは怖かったんだと思う。死を求めているのに、再び生きようとするのが。今まで信じてきたものは何だったのか…。お互いとても弱かったから、逃げることしかできなかった。ただ怖くて、その感情を受け止める勇氣も余裕も無かった。

冷たい雨の中、お互いの涙に気付かないように目を閉ざして泣いた。

それでも私は鈴木さんの事を、少しでも感じられた気がして嬉しかったんだ。

夕方には、雨は止んだ。

ジメジメとした匂いが辺りを覆う。体についた土はこびりついて、もう雨が洗い流してくれることはなかった。海の水で少しだけ汚れを払う。

「これでも着て帰れ。寒さもまだマシだろ」

鈴木さんは来ていたスーツの上着を脱いで、私の肩にかけてくれた。見た目には多分物凄く不自然なのだろうけれど、スーツからは少しの体温が感じられて暖かった。

「ありがとう」

しっかりとその胸元を握りしめる。冷たい風。濡れた体には堪えだが、鈴木さんはもつとずっと、寒いはずだ。

「俺が、アンタを連れていくことはないよ」

ハッと顔を上げると、鈴木さんは真剣な瞳で、ジッ、と私を見下ろしていた。

「そんなん、俺には強制できねえし。…でも、もしもアンタが本当に望むなら、俺が迎えに行つてやるよ」

「鈴木さん…」

「ユイを、待つてる」

眩しい光が砂浜を照らしていた。波の音と、鈴木さんの息遣いが僅かに聞こえた。

「じゃあな」

耳元の声。背筋がヒンヤリとして、思わず震えた。それが寒さのせいなのか、そうじゃないのか…、私には分からなかった。

分からない事ばかりだ。

鈴木さんを海に残して、私はその場から立ち去った。来た時と同じように海岸公園を通り抜けて、バスに乗り込む。

家に辿り着くまで、周囲の奇異な視線を感じていた。でもそれは、全く気にならなかった。

その後

「気が済んだ？」

家に帰ると、そんな母親の冷たい視線に迎えられた。敢えて目を合わせないよう、自室のある二階への階段を上ろうとすると、その後を母親が追いかけてきた。

「アンタ、あたしから逃げられると思ってんじゃないでしょうね」
振り返ると、母親は大きな瞳を更に見開いて私の腕を掴んだ。
まるで、飲み込まれそうだ。

「何よ？その顔は。…勘違いしてんじゃないわよ。アンタなんていらなかったのに…生んであげただけでもあたしには感謝すべき立場なんだから。分かってるわよね？」

掴まれた右腕に、ギリギリと力が入っていくのが分かる。母親の細い腕、思い切り振り払えば簡単に降りほどけるのに、なぜかそうできなかった。

「だからもつともつと、働いてもらわないと。これからまだ学費とか、色々お金だつてかかるんだから…。大体アンタに不満なんて何一つあるはずないのよ？だって、周りの子たちと同じように、あたしは全てを与えてあげてるじゃない。それぐらい、我慢して当然でしょ」

そう言つて母親は腕を放し、私に背を向けた。ジンジンと残る腕の感触。そこに触れると、まだ温もりが残っていた。

『周りの子たちと同じように、アンタには全てを与えているんだから』

全てじゃない。

（一番欲しいものだけは、一度もくれたことないじゃない）

腕の温もりはすぐに消えた。濡れたスーツを抱き寄せると、ほんのりと鈴木さんの香りがした。

『生きていること』

それだけで私たちは現実に感謝すべきなのだろう。それ以上を望む事はもはや贅沢でしかなく、私たちはいつも我儘ばかりを言い合っている。

『死を求めること』

それだつて本当はとても贅沢なことだ。生きたくても生きられない人だつているのに…、その人たちにとっては、命を無駄にするということほど馬鹿げたことはないだろう。それでも。

愛情を感じられないというのは寂しいものだ。耐えられない…。

この世界にこれほど愛着も無く、希望も見いだせないとなると、もう別の世界にそれを求めるしかないのだ。まだ見ぬ世界には、もしかしたら光が転がっているかもしれない。もうずっとそれを信じて、私はここまでやってきたのだ。

それなのに、鈴木さんと出会ってから、私は「その感情」を知ってしまった。

誰かに会いたい、触れたい。

そんな人間らしい欲望。怖かった。自分の心でも、感情はコントロールできない。

惹かれていく。

この世界にも希望がある、それを認めてはいけないと思った。死を求めていたのに、それが間違っているだなんて、私には耐えられない。きつともう、どうしていいのかわからなくなってしまふ。

それに鈴木さんも、死を求めている。しかも鈴木さんは、私のようにそれを疑うことが無く、もつと深いところでそれを信じていた。だからもう、多分…。

これで良かったのだ。この世界に未練など残したくはない。私もこのまま余計なことなど考えずに済むのだ。

次の日は晴れていたけれど、鈴木さんは海に現れなかった。

翌日も、その翌日も。

私の生活は、鈴木さんに会う前と同じものに戻った。砂浜で一人、ぼんやり海を眺める。まだ水は冷たくて、風も強い。

ザク、ザク…。

ゆっくり、確実に。綺麗に足跡をつけながら、私は砂浜の上を進んだ。暫く西に進むと、海に突き出た岬、素っ気なく聳える岩壁が現れる。少し急な斜面の階段を、手摺りを掴みながら私は慎重に登って行った。

クネクネと向きを変える段差を登ると、少し開けた、それでもかなり狭い頂上地点に到達する。その場に立つと、視界いっぱいにはキラキラと輝く海が現れた。見渡す限りの海。左右どこを見ても青色が広がっていた。

錆びれた柵に寄りかかり、上着のポケットから煙草とライターを取り出す。

鈴木さんのスーツに入っていたもの。

水を吸って皺くちやになりながらも、箱の中身は無事なようで、まだ半分ほど本数が残っていた。この煙草を見ると、自然と鈴木さんが煙草を吸っている姿が思い出される。

（あの人は、ずっとコレに頼っていたのだろう）

鈴木さんが心に何を抱えていたのなんて、全く知る由もない。だから今更私がどうこう考えたところで、もう何の意味も無いのだけれど。

この海を訪れること。私にとって、この世界から逃げ出すための方法がそれなのだとしたら、鈴木さんにとってのそれは煙草だったのかもしれない。鈴木さんは決して煙草が好きなのではなくて、煙草を吸う事で自分の精神の安定を保っていただけなのだろう。

その煙草を一本取り出そうと、私は箱を傾けた。

スルスルツ…。

すると一本どころか全ての煙草が箱から流れる様に飛び出して、手の中からポロポロと落下していく。

「ああっ！」

手を伸ばす。けれどそれは叶わなくて、後は大きく乗り出し過ぎた私の体が柵から外へ飛び出して、煙草と共に空中へと投げ出されただけだった。

体が浮いたような感覚。

その瞬間一気に落下する。どんどん、どんどん海に近づいて、全身に衝撃が走った。

バシャアンツ……！！

それでも私は落下していく。海の中深くどこまでも、沈んでいく。ふと、伸ばした手に視線を移した。その手にはしっかりと、煙草の箱が握られている。こぼれたはずのいくつかの煙草も、その箱の中にきちんと納められていた。

（ユイ）

頭の中で声が聞こえる。ハツとして振り返ると、そこにはニツコリと微笑んで、手を伸ばす鈴木さんがいた。

（鈴木さん！！）

水の中の冷たさも、息苦しさも、私には何も感じられない。この場所であつた、鈴木さんに出会えたこと。それだけが運命のように私の胸を打ちつけて、涙が零れそうだった。

（待っていてくれた、私を……。待っていてくれた！）

地上から随分離れた、こんなに深い場所にいるのに、光は差し込んでいた。眩しいぐらいに。

私は躊躇いもなく、その手を握った。

太陽は相変わらず優しく世界を照らしている。

穏やかに笑いながら、全てのものに等しく降り注ぐ光。それはいつどんな時も、どこにいても美しく照らしてくれるのだ。そうして暖かな表情で、存在する全てのものを見つけて出してくれる。

そう、例えば。

誰の目にも及ばない、深い深い海の底…私と鈴木さんの所までも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5264r/>

空が青い日

2011年3月18日20時10分発行